

巻 頭 言

## 専門日本語教育研究の一方向（2）

専門日本語教育研究会会長

大 坪 一 夫

(麗澤大学外国語学部)

本誌創刊号で、私は、言語能力はかなり長期にわたって一定であること、しかしながら、言語運用能力の1つである理解力は、時々刻々変化していると述べた。また、その変化を起こす原因として世の中に関する知識が重要であるだろうとも述べた。私には、次のような経験がある。ある記事を読んでいたときに「装置が小型化すると、信頼性が増す」という記事があった。この条件と結果の関係がよく理解できなかったので、専門の方に質問すると、「装置が小型化すると、熱分布が一様に近づき、その結果、その装置が壊れにくくなるという意味である」と解説してくださった。理工系の記事であっても行間を読まなければならぬのだということをそのとき悟った。業界の常識は、書かずに済ますということに過ぎないのだが、業界外の人間には常識がなく、常識のない人間には、行間が読めないことの適当な例になるなど思ったものだ。

しかし、「専門馬鹿」という言葉もある。素人ならば、簡単に解決できる問題が専門家にはなかなか解決できないということがときに起きる。司馬遼太郎が描く第2軍の旅順攻撃での参謀の考え方がその極端な例だろう。ある知識が理解を妨げたり、誤解の原因になったりする場合もありうる。一般的に読解能力が高いと考えられている中国人留学生に資本主義経済についての教科書を読ませたときに、共産主義経済の頭をもつ学生がいかにも多くの誤解をしたかをその授業を担当した方に聞いたことがある。私自身も失敗した経験がある。ある共産圏の国で非常にいい日本語の辞書ができたのだが、すぐに売り切れてしまって、その時点では入手困難になっているという話を聞いて「再版しておおいに売ったらいいではないか」と私が言うと、「それは、資本主義社会の人が言うことであって、計画経済の社会ではそうはいかないのだ」と簡単に一蹴されてしまった。生半可な知識が理解力を低下させる面白い例だと思う。

世の中に関する知識と言語理解の関係は、なかなか複雑なものようだ。ところで、日本人は、専門科目の外国語の知識をどのようにして身につけるのか考えてみることも知識と言語の理解について考える場合、参考になるかもしれない。大学に入るとたくさんの概論の授業を受けることになる。私が受けた哲学概論の授業では、先生は日本語の術語にドイツ語訳と英語訳を添えて板書なされた。私は、あの先生は学生がドイツ語を習っていないことを知らないのだろうかと思議に思ったことを今でも思い出す。無駄なことをするものだと私はそのとき思った。しかし、先生の意図は、将来学生がドイツ語で哲学の本を

